

84 誌上発表

Erwin Von Bälz と女子医学教育

三崎 裕子

埼玉県所沢市

『吾園叢書』所収の1881(明治14)年の中央衛生会議事録に、ベルツ(Erwin Von Bälz)が女医の認可に強く反対する意見が記録されていることは、拙論『近代的明治女医』誕生の経緯と背景』において指摘したとおりだが、ベルツは日本の女子教育について独自の意見を持っていた。それは、1889(明治22)年に著された「女子教育上ノ弊害ニ就テ」という演説原稿(牧野伸顕文書所収)に明示されている。

そこでベルツは、女性は結婚して夫を支え、子女を養育することが必然であるという意識の下、とくに女子が高等教育を受けると生じる弊害と、女子教育のあるべき姿について述べている。まず女子が高等教育を受ける弊害については、女子が男子と同様の学問を習得することは、結婚生活を送る上で家庭の不和につながると指摘した。従って家庭運営には不要とベルツが考える、哲学・天文学・代数・幾何等の諸学科を女子に教えることは止めるべきとした。また14才以上の女子の「処女の春季発動期」には、学問をすることで、その神経系統の筋肉及び血液循環の働きが抑制され、心身健全な女子の育成に問題が生じると述べた。ベルツにとって女子がなすべき学問とは、家事に関わる程度の数学や科学的知識の取得であり、学問よりもむしろ身体の発育の為に体育を推奨した。このようなベルツの女子教育観においては、男性と同等な医学教育を求める女子学生や女医希望者にたいして、彼が批判的な態度で臨むことは当然であった。

ベルツは中央衛生会の会議で、ドイツで女子医学教育に携わった経験を述べ、男女共学によって「^(ママ)褻褻の弊害が生じる」と、それを批判した。彼が大学で女子医学生に指導できる可能性があった期間は、ライプチヒ大学を最優秀で卒業した1872年4月から、渡日する前年の1875年末までのライプチヒ大学時代と思われる。この間、1875/76年冬学期からロシア帝国領(現ウクライナ)オデッサ出身のマリー・エーテル(Marie Oertel)という女性が初の女子聴講生としてライプチヒ大学医学部に在籍していた。非常に短い期間であるが、ベルツが接した女子医学生はマリーであった可能性はある。しかし彼女は女医を認めないドイツを見限り、翌年スイスのベルンに転じ、そこで医師の資格を取得した。

ベルツが渡日した同じ年の冬学期から、イギリス生まれのホープ・ブリッジス・アダムス(Hope Briges Adams)がライプチヒ大学の聴講生となった。彼女はライプチヒ大学で様々な苦勞の末に初めて医学の全過程を学び、公的なものではないが1880年に男子学生の国家試験と同じ内容の試験に合格したが、ドイツの正規の医師として登録されたのは、その25年後のことだった。ホープの伝記によれば、彼女は女子医学生に対する非常に厳しい環境の下で必死に勉強し、資格を求めて積極的に活動した。ドイツでの女医の認可は他のヨーロッパ諸国に遅れており、結局、ホープは国家試験合格の実力を持ちながら、マリーと同じくベルンで学位を取得し、その後イギリスで医師開業免許を得た。ホープは非常に独立心が強く、後に社会主義思想に傾倒し南ドイツの社会主義活動家を援助した。彼女とベルツとの接点の有無はわからないが、先に述べたようなベルツの女子教育観からすると、女性としては最も敬遠する人物であったろう。

『ベルツの日記』の1879(明治12)年7月10日の記載には、ベルツが日本の「上級の学校の女子学生たち」を褒める記載がみられるが、1881(明治14)年の中央衛生会議事録では、ベルツは女子師範学校の生徒を「尋常の女子とは別様の風姿ありて、処女柔婉なる良儀に乏しい」と批判した。この短い間の日本の女子高等教育や、それを求める女子学生たちの著しい変化は、ベルツにドイツにおいて男性と同様の医学を学ぶ機会を求めて激しく活動した女性たちを彷彿とさせるものだけに違いない。

以上、日本の女子医学教育にも少なからぬ影響を与えたベルツの女子教育観、女子医学教育観について述べた。